

# まえがき

学校長 小松 周吉

本年8月30日、新しい高等学校学習指導要領が告示され、昭和57年4月から施行されることとなった。また大学入試の新しい試みである共通第一次試験も、去る10月2日から願書の受付が開始されている。今年の高校教育界は、多忙な一年になりつつある。こうしたなかで「高校教育研究」第30号を発刊することは、まことに意義深いことであり、同時にその責任の重さを痛感する次第である。

ここに収録された論文は、教育課程及び指導法に関する研究3件、教科外教育活動に関する研究1件、外国人学生受入に関する研究1件計5件である。

まず米谷教諭の「基本的生活習慣の指導について」は、高校生の基本的生活習慣の指導の一環として、「おはようございます」「さようなら」などの日常の挨拶を忘れる生徒に対して、アンケート調査を実施することにより、その反省の機会を与えるとともに、その実態を考察したものである。

小倉教諭の「地誌教育—とくに中等教育における世界地誌の取り扱いについて—」は、わが国における地理教育史において地誌教育が占めてきた位置と役割を明らかにし、さらに中等教育における世界地誌の取り扱いについて、各国の教科書の叙述例を挙げて検討したものである。とりわけ挙例のフランス地誌に関する部分は、注目に値しよう。

石川県理科研究グループ（責任者、本校中原教諭）の「ストーリー化した総合理科の試み」は、文部省科学研究費による研究で、昭和57年度から施行される新高校学習指導要領による新しい科目「理科Ⅰ」について、中原教諭が責任者となり、石川県下の中学校及び高等学校の理科担当教諭約40名の意見を整理し、総合したもので、その要旨は、すでに本年8月金沢市で開催された理科教育全国大会で、本校倉教諭が発表している。

能崎教諭の「東ドイツの数学教科書紹介—海外教育事情視察報告その3」は、本紀要第29号に報告された「その2」に続いて、今回は、第11学年用数学教科書の第3章から第5章までを紹介したものである。

樫本教諭の「本校における外国人学生の受入とその適応について」は、本校が過去も年間に受入れた5人の外国人学生の指導経験に基づき、外国人学生が日本での生活や本校の教育に適応して行く上での、指導上の問題点及び留意点を考察したものである。

さて本年度本校最大の課題は、何といたっても新しい大学入試制度に対応した進路指導をいかに効果的に進めるかという点であった。その上本校では、春秋二回の長期にわたる学部学生の教育実習が行なわれている。上記の諸論文は、こうした多忙な教師の勤務のなかでの研究成果である。各方面からの卒直なご批判ご意見をいただければ幸いである。